

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 247 載

狐憑きの真相

誰もが耳にしたことがあるであろう「狐憑き」。狐にとりつかれて、狐のような仕草をしたり、理解しがたい行動を取ったりする。

今では、狐のせいではなく、精神病の一種とされているため、何となく納得する病名がつけられる。近年、狐がついたということを信じる人はほぼ皆無だと思うが、半世紀前まではまだポピュラーな概念だった。

岡田靖雄氏は、狐憑きは今や精神病であることを認めたくせぬで尚、「……いなくなつたとみえる狐は、都会地でもすぐ近くに身をひそめているのである」という表現をしている。昭和58年のことである。

狐憑きに代表される、いわゆる動物が人間に憑依する現象は、今昔物語などの古典でもごく自然に描かれている。狐だけでなく、狸、蛇、犬神、猿などの小動物がとりつくたとされるが、中世ヨーロッパで起こった魔女狩りの魔女たちは、使い神として、猫、ねずみ、ガマなどを使ったといわれ、両者の類似性がうかがえ

る。明治時代の狐憑きの実態をみてみよう。東京の大学病院で助手を務めていた島村俊一は、狐憑病の実態調査のため、明治24年に島根地方へ出張を命じられた。尾道を経て、松江・出雲・石

つまり、現代にもみられる病であっても、それを狐が憑いたため、とらえているのだ。具体的な症状として、人格転換や幻覚などがあげられているが、卵巣のう腫の女性は、精神症状はないものの、腹部の痛みを狐が入り出すためと信じているのだという。病気の原因が解明されていない時代なので、理不尽な病に冒されると、それを狐のせいにするので納得感を得たのかもしれない。自ら狐が憑いたと認めている者あれば、周囲から



見・隠岐をめぐり、各地で狐憑病患者を認める。その数34名。具体的な診断名を、パラノイア（偏執症）、ヒステリー、マラリヤ、関節炎、卵巣のう腫などにつけてはあるが、皆同じ狐憑きだと概称する、とまとめている。

問われて自覚した者、祈祷によって指摘された者など様々で、34名中男性が13名、女性21名である。狐憑きは女性が多く、また日本各地に患者は存在するが、その中でも山陰地方は患者が最も多い地域として知られていた。

病理面ではなく、その現象を家庭内の浄化作用とみる研究者もいる。家長制が根強く家が閉鎖的であった時代、嫁に降りかかるストレスは想像を絶するものがある。嫌気がさした嫁が出奔して一時的に行方不明になると、それを狐が憑いたと称し、村の長が騒動を治めた、というものだ。息苦しい家庭内から逃れるための嫁の行為を責めることなく、また狐という第三者を介入させることで責任の所在をあいまいにし、いわば家という空間における集団的精神療法の一種と解釈する。私は、この説をわりと気に入っていて、授業でも紹介することがある。

人間誰しも、突発的で不可思議な行動に出ることがある。それを狐が憑いた、と表現するのは、今でもなかなかの説得力があると思うのだが、いかがだろうか。

イラスト・伊藤香澄